

Ⅲ-6

環境学習を進める際の留意点



(1) 環境学習の特色

環境学習の内容や学習方法は多岐にわたっていますが、ここでは、「関係性学習」「統合的学習」という二つの視点からの特色を見ていきます。

① 関係性学習……つながりを意識

環境問題は、自然環境だけでなく、政治・経済・文化・健康など、人間に関わるあらゆる問題が絡み合っています。環境教育は、こうしたつながりを理解したり、求められる新たなつながりを構築する＝「関係性学習」として深化させることが必要です。

「人と自然のつながり（人と他の生物）」の関係を見るだけでなく、「人間相互のつながり」という視点もあります。また、「距離的なつながり（他地域、他国）」「時間的なつながり（世代間）」なども考えられます。

さらに、学校内だけで行われる教育から、家庭・地域社会資源の活用、行政機関との連携、環境教育拠点施設との協力、企業の環境教育支援の活用などへと進めることが、つながりについて実感を伴って理解するための有効な手段となります。

② 統合的学習……学問の枠を超えて

環境問題の解決が重要な課題となっている今日、求められる人間像は、時間的には次世代以降を、空間的には全世界を視野に入れて行動できる人間であり、かつ自然と人間の共生をめざす環境倫理を身につけた人間です。

この意味で、環境教育は、自然科学的アプローチのみでなく、人間の思考・行動様式の全てを反映した、人文・社会科学、芸術等による総合的アプローチも求められています。つまり、学問の細分化の枠を超えた多角的な視点から問題解決をめざす「統合的学習」という性格を持っています。

以上、阿部治「なぜ環境教育を学ぶのか」日本環境教育学会編『環境教育』教育出版pp.4-7 教育出版（2012）から要旨を引用



(2) 持続可能な開発のための教育（ESD）の視点から

最近の国内外の取組を見ると、環境教育・環境学習における「持続可能な開発のための教育（ESD）」という視点の重要性が高まっています。持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすような社会づくりのことを意味していますが、ESDの視点に立った学習目標としては、次のことがあげられています。

教科等の学習活動を進める中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う

「持続可能な社会づくりに関わる課題」を見いだすためには、「持続可能な社会づくり」を捉える要素（構成概念）を明確にする必要がありますが、この構成概念の例を以下に示します。

人を取り巻く環境に関する概念	多様性……いろいろなある
	相互性……関わり合っている
	有限性……限りがある
人の意志・行動に関する概念	公平性……一人一人大切に
	連携性……力を合わせて
	責任性……責任をもって

また、ESDの視点に立った学習で重視する「能力や態度」を以下に例示します。

- | | |
|-----------------|--------------|
| ①批判的に考える力 | ⑤他者と協力する力 |
| ②未来像を予測し計画を立てる力 | ⑥つながりを尊重する態度 |
| ③多面的、総合的に考える力 | ⑦進んで参加する態度 |
| ④コミュニケーションを行う力 | |

国立教育政策研究所 教育課程研究センター「ESDの学習指導課程を構想し展開するために必要な枠組み（2012）」から要旨を引用

環境学習を進めるにあたっては、学習者の発達の段階に応じて、活動を通してこれらの構成概念に着目させて考えさせる場面があるとよいでしょう。

また、ここで重視する「能力や態度」は、「生きる力」にも通じています。

(3) 科学的な側面と価値観

環境学習は、身近な自然にふれることによって、自然の美しさに興味・関心を持ったり、自然の有様をそのままに受け入れるところから始まりますが、学習を深める段階で、環境問題や環境自体を科学的に理解するというプロセスが必要になります。

さらに環境問題の解決について考えたり、個人レベルの意志決定、集団レベルの合意形成をめざすという学習段階では、科学的な見方・考え方に基づいて進めるということがますます重要になります。

「科学的」という言葉は一般には「まちがいのない」「確実な」といった意味でとらえられていますが、ある種の環境問題の場合には、科学者の間でも見解の不一致がみられたり、あるいは一致がみられるまでに時間を要し、それまでに判断をせまられることもあります。また、「飲料物の容器は、ビン、カン、ペットボトルのどれがよいか」という問題に象徴されるように、経済性や時代の技術水準を含めた多様な要因が絡み合い、必ずしもベストの選択がなされているかどうか科学的な視点だけでは判断できない事柄が多いのも事実です。

そこで、環境学習を深めていく段階において、個々人の「価値観」をどうとらえたらよいかという問題が生じます。私たちが目指すべき「価値観」は、一言でいえば「持続可能な社会をつくるために」ということになりますが、「我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画」（関係省庁連絡会議：平成23年6月3日改訂）には、人間性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった「価値観」が、育みたい力としてあげられています。

一方、指導者の「環境観」や「価値観」が、学習者に強く影響を与えるということも注意しなくてはなりません。他で紹介されている環境学習の実践から特定の活動を取り上げ、それを「環境によいことだ」と信じて疑わない姿勢は危険です。幼児・児童の発達の段階にもよりますが、せっかくの指導が、かえって幼児・児童に誤った知識を植え付け、科学的・多面的に考える余地を奪ってしまうことにもなりかねません。

幼児・児童期においては、個々人やいろいろな集団の価値観を尊重するという「多様な価値観教育」が環境教育の原点といえます。

